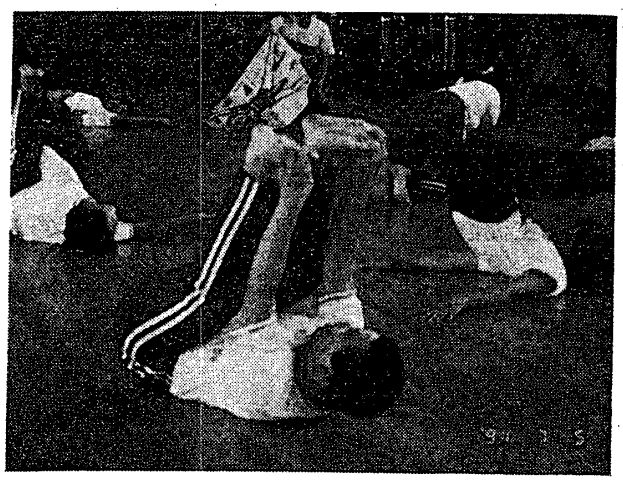
④ **指導の経過**　(佐分利先生に指導を受けた2回目以降の授業の内容)

授業日	主たる活動内容
6月21日	タオルを振る、引っぱり合う、頭に巻く。太鼓やタンブリンを打ち合って話をする。自由に動く。
7月3日	いろいろな身体表現。太鼓・タンブリンの乱打。曲想の違う曲に合わせて、自由に動く。
7月5日	新聞紙に書いた人の形をまねて動く。太鼓・タンブリンの乱打。いろいろな曲に合わせて動く。

⑤ **考察と今後の課題**



変化のある教具、心地よい音楽、そして指導者の巧みな語りかけなどによって、生徒は笑顔や歓声で喜びを表わしながら、生き生きと活動した。創ることが苦手なはずの生徒が自分なりの動きを工夫し、得意になって友だちに見せている。またつま先だちがうまくできなかったH子が、友だちと背のび競争をし、腹筋が弱いはずのK男が、空中に両足をあげた姿勢を保とうと何度も挑戦しているなど、苦手であることを忘れ、いろいろな動きに自ら向かっていこうとする意欲的な姿が、たくさんあった。

自らの課題を自覚し、それを克服するために努力しようとする意欲を育てることも、この時期の生徒には大切である。「動きたい」という自らの意思で、のびのびと自由に力いっぱい活動し、充実感を味わうことができる「リズム表現」に今後も取り組みながら、その中で個々の発達課題にどう迫っていくのか、自己認識の力をどう育てていくかなど、考えていきたい。

〔3〕 合同体育による実践

(1) 合同体育とからだづくり

急速に身体が成長する中学部の生徒に、からだづくり養訓では、サーキット運動のように、からだに直接働きかけるメニューを繰り返すことによって、逞しいからだを作ろうとしている。それに対して体育では、**その鍛えたからだを友だちとのかかわりを少しでも意識させながら、楽しんで動かし更に育てたい**と考えて、以下に示すようなねらいをもって実践に取り組んだ。

① 運動量の確保に努めながら、多様な運動を繰り返し、個人のエネルギーの発散と筋力・持久力の向上を図る。

② できるだけ自分で目的意識や課題意識をもちながら、集団の励ましを受け、学習の課題に挑戦したり努力したり、やりとげたりする態度を育てる。

③ ある程度ゲームのルールを意識させながら、集団と一緒に同じような活動に取り組む中で、個に応じた取り組み（指導）をめざす。

④ いくつかのチームに分かれてゲームを行う場面を設定し、できるだけチームの仲間を意識させ、社会性を育てる。

(2) 合同体育年間計画

(1)で述べたようなねらいに沿いながら、生徒の実態・行事・季節・天候などを考慮して以下のような年間計画を立てている。

4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
陸上運動		サッカー	水泳	陸上運動		卓球・バスケット		綱引き・縄跳び		

それぞれ特徴的で、からだづくりには適しているが、この中で、からだづくりのテーマに取り組んで以来、3年連続して取り組んできたサッカーについて述べてみたい。

(3) サッカーによる実践例

① サッカーを取り入れた理由

ねらいとかかわりながら、次の理由でサッカーを取り入れている。

- 思春期にある中学部の生徒は、TVなどを通して、かっこいい姿にあこがれを抱いており、意欲的に取り組める。特に男子はその傾向が強い。
- ころがす、わたすの発展として床上のボールを蹴るという基本動作で楽しむことができる。
- ルールの工夫によって、幅広い能力の生徒たちが仲間を意識して、共に取り組むことができる。
- 敏捷性、調整力、持久力の向上に効果をあげることができる。

② 実践の経過

一昨年度、昨年度とボール運動の1つにサッカーを取り入れ、生徒の意欲を引き出す実践を積み上げてきた。その中で、汗を出してボールをおいかけようとする姿やチームの仲間を意識し応援する姿や得点したときの喜びを全身で表現する姿が少しずつ見られるようになってきた。

但し、2年間の実践の積み上げが質的な向上に必ずしも結び付かない生徒もあり、ボールから関心がそれようとする生徒をどう生かすか、もっと味方へパスを生かしたゲームができないだろうか、もっと個を生かす工夫はできないだろうかといった課題を考えたとき、更に授業づくりの工夫はできないだろうかと考えた。

そこで本年度は、学習の中で教師がねらいとするルールや方法であっても、一旦「**生徒の考えをくぐらせ、生徒の思いとして出させたルール、方法**」として**生徒の発想を大切にした**授業づくりを試みると同時に、チーム編成の工夫と指導の流れの工夫・個を生かす工夫を中心に実践に取り組んだ。

ボールをうばい合う生徒たち

③ 授業づくり

a チーム編成の工夫

(平成元年度の取り組み) 生徒を2つのチームに分け、お互いのチームが競い合う中で、生徒の意欲をつなぐ。また、その中で技能を習得させる。

(平成2年度の取り組み) (中学部生徒チーム) 対 (教育実習生チーム) というチーム編成をし、チームの仲間意識を大切にしながら技能を高める。

過去２年間の各々のチーム編成にメリットもデメリットも考えられる。が、本年度は中学部13名の生徒を２チームに分ける平成元年度のチーム編成の方法を採用した。生徒同士の競い合いの中でより仲間を意識させようというねらいと、教師も含めて学年の枠をこえた縦割りの集団を大切と考えたからである。そのチームを合同生活単元学習の場面でも生かし、そこでの仲間意識の高まりを更にサッカーでの仲間意識に生かそうとした。また、全教師がいずれかのチームへ入ることによって、あるときは補助者として、あるときは相手チームの壁として、あるときは声かけによって生徒の参加意欲を高める人としての役割がゲームをしながら果せ、また、個別の配慮もしやすくゲームの内容を高め、深めることができると考えた。

また、表14に示すようにチーム内を更に補助がなくともボールを追い、蹴ることができるＡグループと、声かけをしたり補助をすれば、よりゲームを楽しむことができたり、激しい運動はひかえたほうがよいＢグループの２つのグループに分け、各チームのＡグループ同士、Ｂグループ同士でゲームを行い、Ａ・Ｂグループの得点の合計をチームの得点とした。

表 14　サッカーの得点表

すいかチーム	Ｂグループ（○点）	Ａグループ（●点）	合計得点（○＋●点）
	↕（ゲーム）	↕（ゲーム）	
ギニュー特戦隊チーム	Ｂグループ（☆点）	Ａグループ（★点）	合計得点（☆＋★点）

※合計得点によって、ゲームの勝敗を決定する
※チームの名前も生徒の発案による。

b　指導の流れの工夫

我々のねらいは、生徒一人ひとりが一時間の授業の中で活動しきることにある。そのためには生徒のおもいを引き出し、それを授業に生かすことができれば、生徒の授業への参加意欲も盛り上がり、しかもリラックスした雰囲気をつくることができるのではないかと考えた。しかも、そのような雰囲気の中で何か１つ積み上げることができるのではないかと期待していたわけである。そこで

前時の課題を思い出す ➡ **話し合い** ➡ **練習** ➡ **成果を試す試合** ➡ **反省をし、課題をみつける**

のような学習の流れをとり入れた。生徒たちが特におもいを出し合った内容は、表15に示すとおりであるが、その中から、ゴールキーパーについて話し合った授業を例示する。

表 15　話し合いの内容

○チーム名・キャプテンをきめよう。
○キーパーが必要だ。
○上手に攻めよう。
- シュートのしかたを工夫しよう。
- ドリブルの練習をしよう。
- チームの中で役割を分担しよう。

学習活動	生徒の反応
①前時の課題を話し合う。	**攻めてばかりでは、点を入れられた。** **相手チームに勝てない。（←前時の課題）**
②どうすればよいのだろうか。	ゴールにボールを入れないように守る人がいる。
③ゴールを守る練習（ゴールキーパーの練習）をしよう。	ゴールキーパーの姿勢をしよう。 ・両手を大きくひろげよう。 ・両足をひらいて、腰をおとそう。 ・くるボールをよく見よう。
④キーパーを交代しながらゲームをする。	
⑤キーパーがいると点が入らない。	**・やはり攻めることも必要だ。** **（→次時の課題へ）**

c　個を生かす工夫

・ペナルティーキック　A、Bどのグループのゲームであっても、本時のゲームで生かし切ることができなかった生徒にペナルティーキックをさせる。

・個人賞の設定　まとめの段階で個人賞（シュート賞、キーパー賞、特別賞）を発表し、全員でほめ、それぞれの得意な面や良さをアピールする。

※練習場面・応援にいたるまで7名の教師が一丸となって常に生徒のキラリと光る姿を見つめ、少しの変化も見逃さないで、その子の良さを引き出していく姿勢が重要であった。

④　単元を終えて

13名の生徒を2つの縦割り集団にわけ、7名の教師もいずれかの集団に入り、生徒の思いを引き出しながら授業づくりに取り組んできた。

生徒から思いを引き出しながら単元展開したことは、時間ごとのめあて、練習課題、練習目的をもつことができたと考える。それによって、ねらいとした動きを多くの生徒ができるようになったり、ボールに集中する姿がみられるようになった。

ゲームの中では、単元の初めの頃は自分のチームの仲間がはっきりとしてなかったり、攻めるゴールを迷っていたT男やN子が、リーダーの指示や仲間の動きから相手チームに勝とうと意欲的になり、必死でボールを追いかけるようになったり、キーパーをまかされたT男やK男が身体全体でボールを受け止めたりする姿へ変わっていった。また導入の場面から気持ちを盛り上げ、声かけをしたり、補助をしないと中々参加しにくかったR子やH子が、個人賞をもらったことから、サッカーを楽しみにし、一人でボールの近くへ移動したり、一人でボールを蹴ろうとする姿を見せるように変わっていったりした。また昨年まではどちらかといえば、自分中心にボールを追いかけるといった態度の多かったS男が、チームのキャプテンをまかされたことによって、学習前からチームの仲間とドリブル練習をしたり、シュート練習をして、なんとかゲームで得点をしようと意識したり必死にボールを追いかけるような姿も見られた。更にこの縦割り集団を中学部合同生活単元学習の場にも活用してみた。『野外炊飯』と『臨海学校』の合同まき作りの場面では、キャプテンを中心に、キャプテンの指示に従って、相手チームよりうまくやろうと団結する姿がみられるようになった。そして、この上級生が経験の少ない下級生の援助をしたり、うまく指導するといった姿、チームの意識やリーダーシップが更にサッカーのゲームの中にも生きていることが、試合や練習中の声かけやパスや励ましなどに感じられるようになった。

⑤　今後の課題

過去2年間の実践の上に本年度も生徒の仲間意識を育てようといった面から実践に取り組み、新しい成果や新しい生徒の姿をみることができた。しかし、授業中教師と一緒なら盛り上がるサッカーも、余暇時間にみんなでゲームをするところまでは広がっていない。もっともっと生活に密着した遊びとしてサッカーが生かせる方向に更に援助していきたい。